

男女共同参画社会へ向け、まず現状認識を

Be Aware of Present Situation to Realize a "Gender-Equal Society"

上瀧恵里子 Eriko JOTAKI

平成23年3月10日、東北大学金属材料研究所の男女共同参画セミナーで講演し、その際に栗原先生から本稿の依頼を受けた。福岡へは翌朝仙台空港発、伊丹経由で戻り、到着直後、東日本大震災が発生した。つい先ほどまで居た場所が地震や津波に襲われるとは信じ難いことだった。被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

さて、本稿執筆にあたり自身のことを振り返った。明治生まれの祖母、昭和一桁生まれの両親のもとに育ち、「男子厨房に入らず」の精神をいまだに引きずっている。ただし学業については高校進学を断念した母の強い思いから大学まで進学することが当然のように刷り込まれていた。なぜ大学に進学するのかは考えず、小学生の頃から高校を卒業したら大学に行くのが当然のように思い込んでいた。ところが中学生の頃、将来大学に進学するという私に友人が「女が大学へ行ってどうするの!」と真剣に私の将来を心配してくれた。しかし、当時はその心配の理由がよくわからなかった。

高校卒業後は思い描いていたように大学に入学し、学業やサークル活動など学生生活を楽しみ、やがて4年生の就職活動時期を迎えた。そこで初めて中学時代の友人の心配の意味を理解することとなる。学生の間は成績がすべてでそこに男女差は入り込む余地はない。ところがいざ就職となると、男女雇用機会均等法が施行される前だったこともあり、求人はほとんど男子学生が対象だ。女子学生に門戸が開かれているのは教員・公務員採用試験と関東・関西を拠点とする一部の企業だけだった。女性は高等教育を受けてもそれを活かす場はごく限られていた。

そのような状況下でも縁があって大学の理工系の研究所に職を得たが、秘書の方を除けば視界に入るのはすべて男性で、たまに女性を見かけると「あっ珍しい、女性がいる」と驚いた。古い価値観のもと、家事を担当するのは女性であり、女性は結婚して家庭に入るか、結婚せずに仕事に専念するかの二者択一のみと思いついていた。職場で男性が多いのは当たり前で、なぜ女性が少ないのかと疑問に感じたこともなかった。実際

に土日も職場に行き、午前様になることも珍しくない生活を送っていたので、二者択一となるのは当然のことと仕事最優先の生活を送った。

転機が訪れたのは、大学全体のシステム改革にかかわる仕事に携わるようになってからだ。第3期科学技術基本計画のもと、女性の活躍促進が謳われ、文部科学省の科学技術振興調整費(現在は科学技術人材育成費)による「女性研究者支援モデル育成」事業や「女性研究者養成システム改革加速」事業が各大学で展開されるようになった。女性研究者が圧倒的に少ない現状、女性が研究を続けていくうえでの課題など、今まで認識していなかった多くの事実、現実について、これらの事業を担当することで知ることとなり、そこに至る背景を考えるようになった。それまで当たり前と思っていたことは実はそうではなかった。私が所属する九州大学ではこの二つの事業を通じ、今まで目を向けられていなかった部分に種々の施策が講じられるようになり、女性研究者を支援する体制が強化され、業績評価にも出産・育児期を配慮する制度が整いつつある。

男女共同参画社会基本法の前文にあるように「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会」を実現するためには、まず現状を把握し、身近にある課題を少しずつ解決していく必要がある。たとえば、ある部局の女性教員比率を数値で示したとき「えっ、こんなに少なかったの」と初めて気づいてもらった。ときどき「なぜ女性だけに支援を」との疑問や批判の声があがるが、現状の種々の課題を認識していただければ、現在の施策がそれを解決するための経過的措置にすぎないことをご理解いただけると信じている。

最後に仕事一辺倒だった我が人生を反省し、これからの若い人たちは仕事か結婚かと二者択一することなく、家族の協力と職場の理解や制度のもと、家庭生活も充実させ、そしてそのうえで仕事も充実させてほしいと願っている。



上瀧恵里子 Eriko JOTAKI

九州大学応用化学研究所高温プラズマ力学研究センター E-mail: jotaki@triam.kyushu-u.ac.jp
九州大学研究戦略企画室 兼務
准教授, 博士(工学).
専門は核融合学.
九州大学文学部卒業.